

聖枚・賊風 第五十八

黄帝曰く、夫子、賊風の邪氣之人と場也。人として病まると言ふ。  
今、其山屏蔽を離れ、室之内の中を出る。其に卒然として病む者  
有るは、賊風の邪氣を離るるに非ず。其の故は何ぞや。

岐伯曰く、此れ皆嘗て溼氣に傷らるる所有りて、血脈の中、分肉の  
間に藏れて、久しく留りて去らざるなり。若し墮墮する所有りて  
要血内に在りて去らざれば、卒然として喜ぶ一は怒り、節はすわると  
飲食す。寒温に通せざれば、時なすわると、眩暈閉いて通せず。

聖 五十八 一

其山閉して、風に遇ひ、寒ゆるときは則ち、血氣凝結し、故邪と纏に  
相ひ籠へば、則ち寒瘧を爲す。其山熱有らば、則ち汗出で、

汗出れば、則ち風を食く。賊風の邪氣に遇はむと雖も、必す加わりて  
發するに因り有り。

黄帝曰く、今、夫子の言ふ所は、皆病人の自ら知る所なり。其山邪氣に  
遇ふ所なく、又、怵怖の志す所なく、卒然として病めば、その故は  
何ぞや。唯だ鬼神に因るの事有り乎。

岐伯曰く、此れ亦、故邪の留りて未だ發せざりしもの有らば、因つて志に

葉の所有り、蒸の所有りに及べば、血氣内に亂れ、所氣相ひ

搏つ。其の從<sup>(よこ)</sup>來たる所の者<sup>(わきま)</sup>は緻<sup>(こま)</sup>なりて、これを視れども見へず、

聽けども聞<sup>(きこ)</sup>えざるなり。故に鬼神に似たり。

黃帝曰く、其の祝<sup>(いのち)</sup>のみなる者<sup>(もの)</sup>、其の故は何ぞ也。

岐伯曰く、先巫者<sup>(は)</sup>百病<sup>(ひやくびょう)</sup>の勝<sup>(かち)</sup>ゆるを<sup>(を)</sup>知<sup>(し)</sup>り、  
病<sup>(びょう)</sup>の從<sup>(よこ)</sup>い<sup>(ま)</sup>は

ずる所を<sup>(ところ)</sup>知<sup>(し)</sup>ば、祝<sup>(いのち)</sup>す可<sup>(べ)</sup>きのみ。